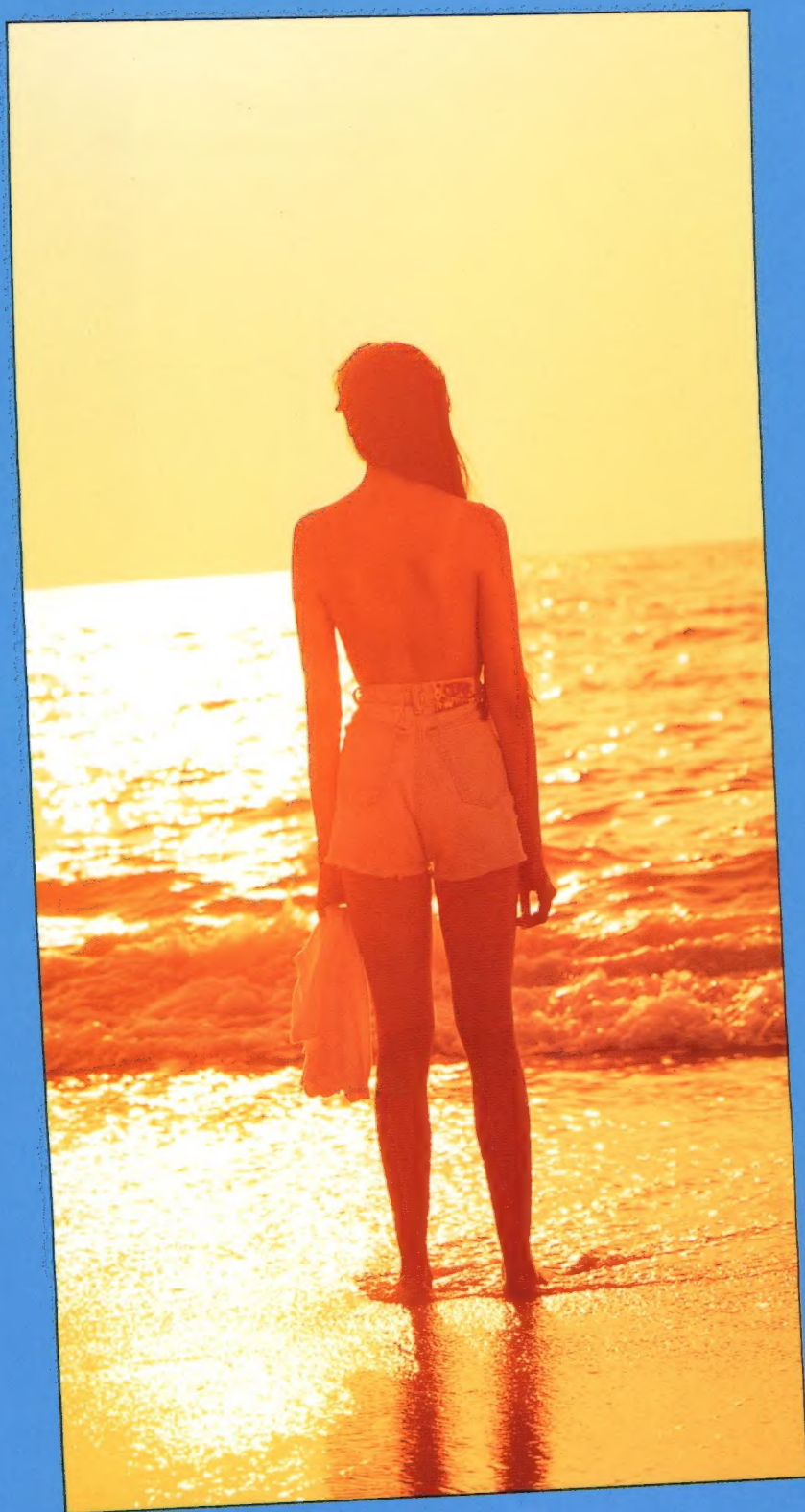


ISBN4-7648-1693-8 C0076 P2000E



定価2000円(本体1942円)

伊藤智恵理

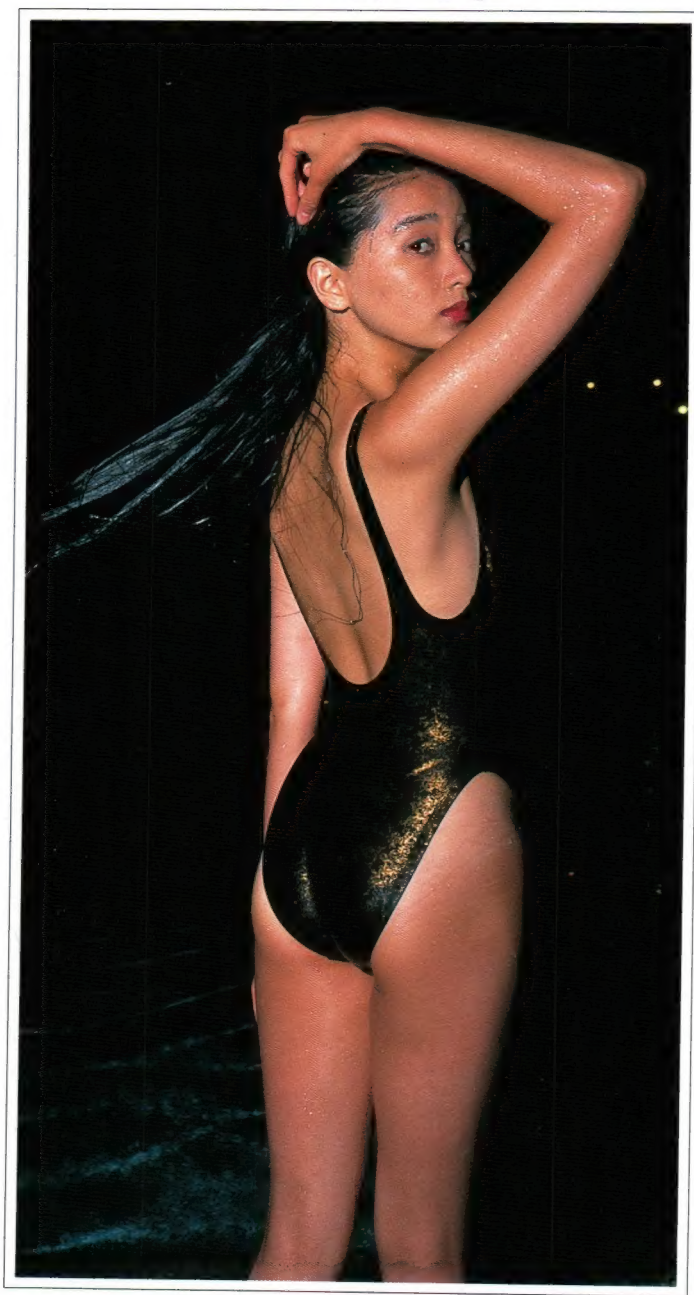
ลังปะกิตา

撮影/原田つとむ

# CHIERI

伊 藤 智 恵 理 写 真 集

「サンパギータ」



●撮影：原田つとむ

●スタイリング：下田真知子●ヘア&メイク：和田明美●撮影アシスト：貴田耕司●ロケーションコーディネイト：森田次郎・CHART (A・P・S)

●アートディレクション：廣野展生●デザイン：刈谷紀子●編集：水上也寸志

●文：野依美幸

●制作協力：株式会社オフィス・ジュニア

平成4年7月5日発行

発行人 小杉修造

発行所 株式会社近代映画社

〒104 東京都中央区銀座6-8-3 尾張町ビル2F

営業部：Tel 03-5568-2811

編集部：Tel 03-5568-2821

印刷所 大日本印刷株式会社

写権・版下 株式会社バンアート

©1992 Kindaieiga-sha

本書の無断複写・複製・転載を禁ず。

落丁・乱丁本はお取り替えます。

定価はカバーに明記しております。

ISBN4-7648-1693-8 C0076





































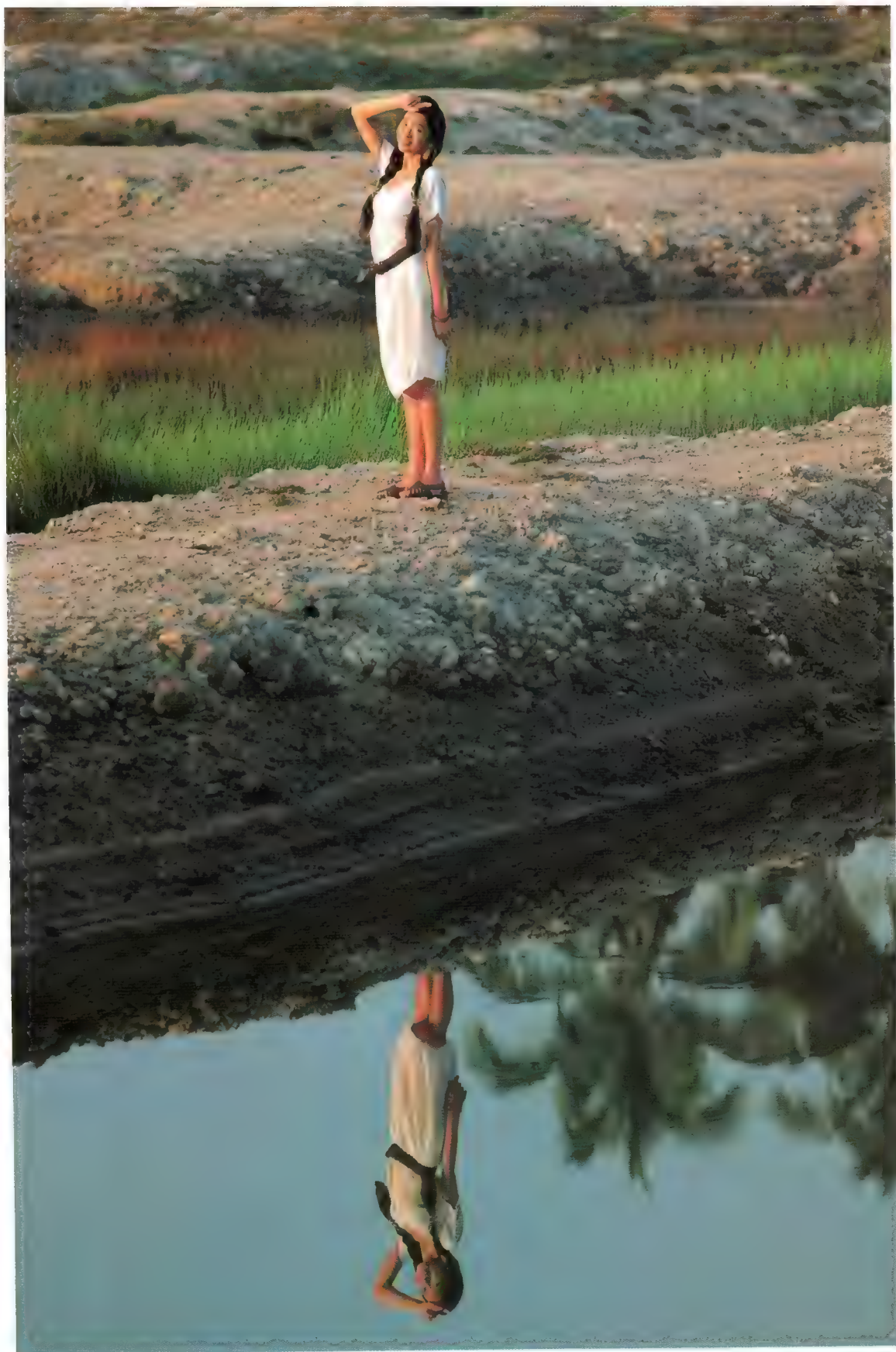
















私と彼は確かに愛し合ったのだ。二人でこの花を、幸福な気持ちで眺めた。

あれは事実だ。

彼は存在しているのだ。

私は大事なことを、サンパギータに学んだ気がした。

別れは決して、人を惨めになどしない。記憶としても、形としても残りうる。それは、心の持ちようで素晴らしいものとなりうるのだ。風はたえず変化する。いつも、同じ風が吹いているわけではない。きつとまた、新しい風が私を包み込むだろう。

別れるということは、一つの新しい出会いに近付けたということなのだ。

私はサンパギータの青い花弁に顔を近付けた。そして、甘酸っぱい香りを思いっきり吸い込んだ。

彼との思い出が体中に浸透してきて、リトマス紙のように変わっていく自分を感じた。

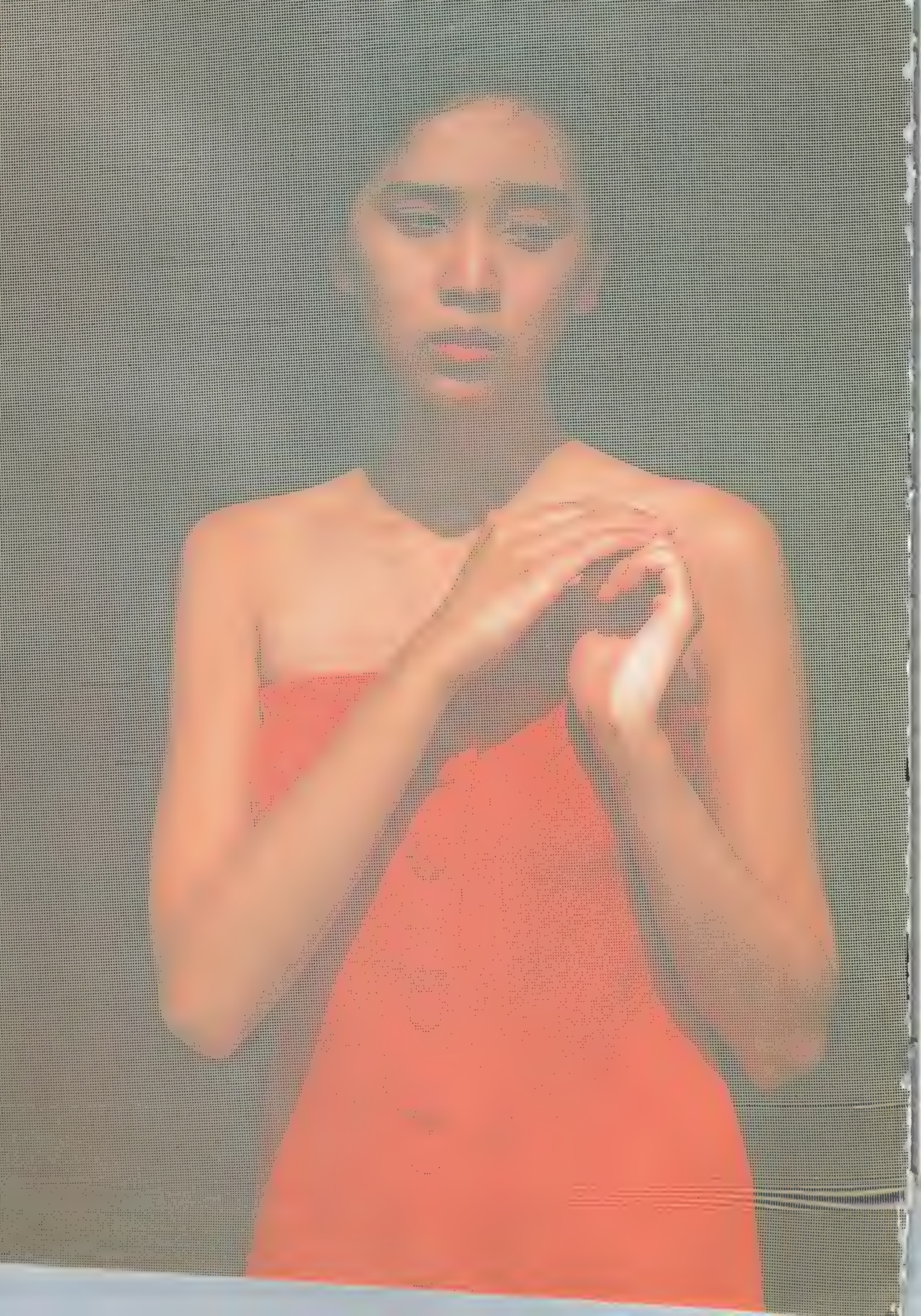
慣れるのは 嫌だけど

せめて

傷つく期間が少なくなれば

そう願う 刹那





サンパギータ

## サンパギータ

私は乳白色の朝もやの中を歩いてた。体は休息を望んでいるのに、結局眠りに落ちることは出来なかった。

乳白色のもやが、まるで神秘の世界に誘う案内人のように私を導いていった。

自然からみれば私はちっぽけな存在ではない。でも、生きている。あらゆる感情に流されながらも生きている。そのことが私の心を切なくした。

突如、乳白色のもやが消え視界が開けた。

私は目の前の光景に息を飲んだ。そこには一面のサンパギータ。青白い花が朝日の中で輝いていた。芳香が鼻をくすぐる。

私は島に来てから、サンパギータを意識的

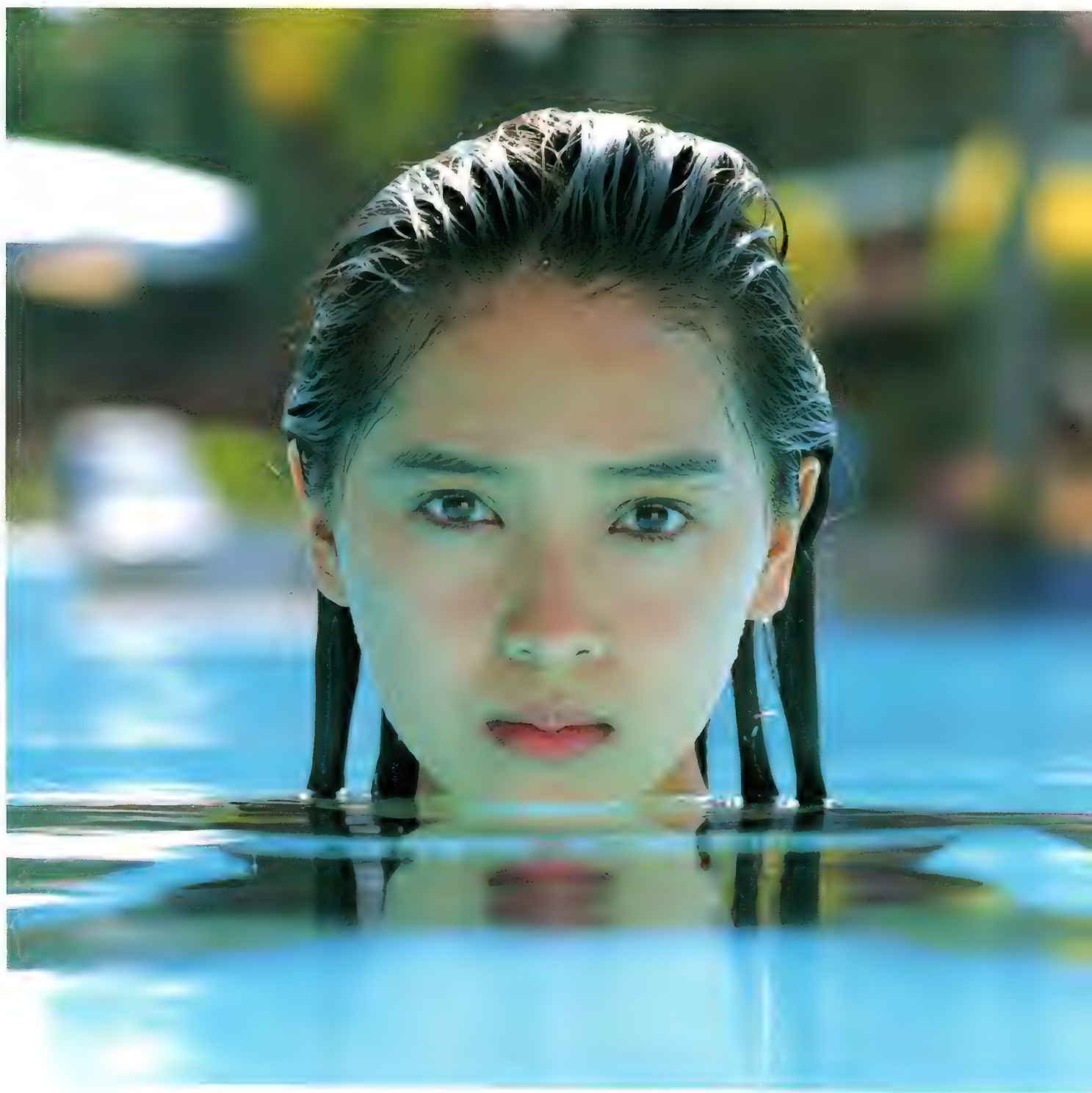
に避けていた。それは決して私の心を喜ばしはしない。切なくするだけだと分かっていたから。

サンパギータを避けることで、彼と自分を忘れようとしていた。始めから存在しない人だと思おうとしていたのだ。

でも、それは間違っていたのではないか。

私はサンパギータの青白い花々に圧倒されていた。







# Pride

## プライド

「似合わないことするからよ」

私はウィッグをはいだ。

折れたハイヒール。

心が虚しさでいっぱいになった。

訳の分からぬ怒りが込み上げ、全身が小刻みに震えた。

体にまといつくブワゾンの香りが私をしめつける。まるで汗にまじって毛穴からしみこみ、私の内部にじわじわと浸透していくような不快感が、私を襲った。

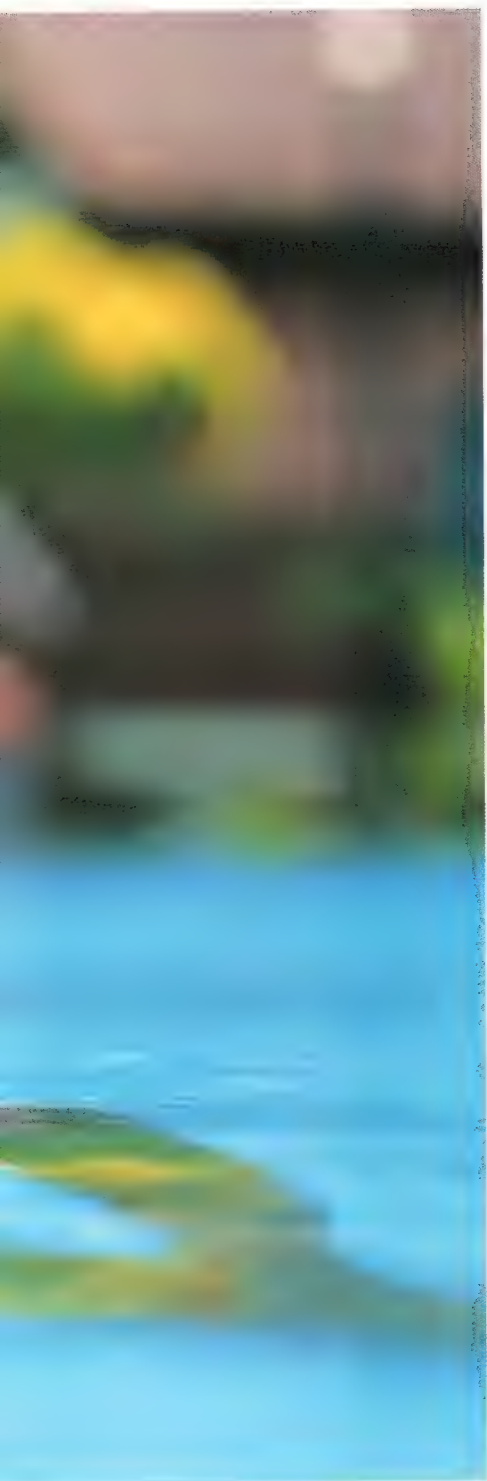
気がつくとい私はプールに飛び込んでいた。不快な匂いをはぎとるように手足をばたつかせ、がむしやらに泳いだ。

泳いでも泳いでも、匂いは離れない。

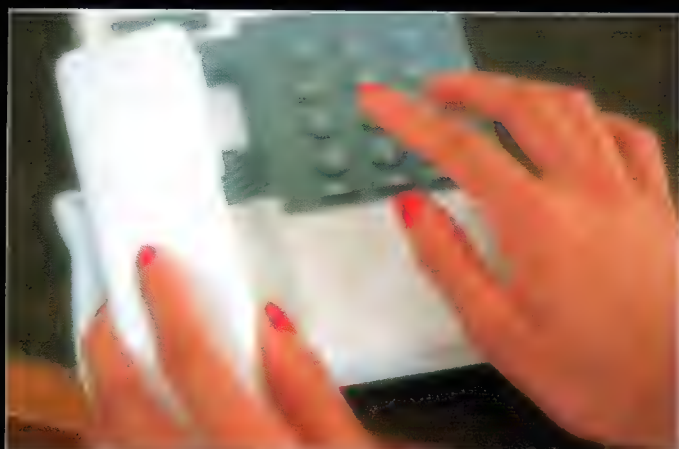
私は疲れきって、ぼつかりと仰向けに浮かんだ。辺りは静寂に包まれている。

ツンと心の糸が切れた。

次の瞬間、瞼からさらさらと涙が流れ、プールの水と同化していった。







私は華やいた気分になり、電話に手を伸ばした。そして、受話器に囁いた。

「素敵な夜をいただけるかしら」

電話の向こうに相手はいない。

「そう、今日の分は予約が入ってるのね。分かったわ。残念だけど、じゃあまた明日」

そう架空の相手に告げ、受話器を置いた私の口元はほころんでいた。

悪くない……。

私はショートのウィッグをつけ、ドレスをまとい表に出た。

男たちの熱い視線が私を射る。

決して悪い気はしなかった。が、徐々に苦痛になっていった。まといつく幾つもの視線に足がすくんだ。私はまだ、射られた視線をきりげなく裁いていける程、心は外面に近づけてはいなかったのだ。

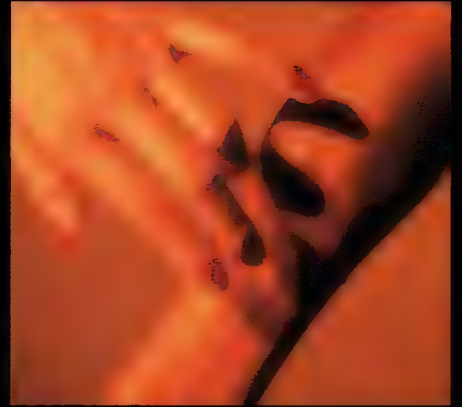
次の瞬間、足がからまり上体が崩れた。











潤んだ目。  
果実のような唇。  
しなやかにたゆたう腕。  
誘われるように、ゆっくりと近づいてくる  
彼を想像した。  
彼の指が無防備な私の胸に伸びる。  
心臓が脈打つ音を感じた。  
ドクドクドクドク。  
全身に送られさる赤。  
指先に、爪先に。  
隅々にまでいきわたる赤。  
暖ったかい。



私は恐れを振り払い、再度、鏡に手を伸ばした。緊張した手が鏡に近づく。

指先が触れた。  
すると、ひんやりとした冷気が、私の中に入ってきた。

脳裏にいつか見た映画のワンシーンが浮かんだ。

スクリーンの中で、主人公の彼女は、カウチに寝そべり、挑発的に私をみつめていた。

私は彼女を真似て、ポーズをとってみた。  
悪くない。

もし彼がそこにいたら……

## メタモルフォーゼ

「変わるわ。自分のために……」

私は、今までつけたこともないような、真っ赤な口紅に手を伸ばした。

ブラシに紅をたっぷりと含ませて、唇を丁寧に塗り潰す。

ペーパーにキスマークをつけ、落ちないように重ね塗りをする。

それを何度か繰り返し、唇はチェリーのように became。

うなじに香水をつける。  
ブワゾン。毒。

香りの魔力に、一瞬めまいを覚えた。体勢を立て直すと鏡の中に別の私があった。

私は瞬きもせずに、違う自分に見入っていた。

これが私……。  
そして鏡に手を伸ばした。

駄目よ。  
触れる寸前で私の手は止まっていた。

もし触れたら、シャボン玉のように、何もかも

消えてなくなってしまうのではないかしら、そんな錯覚が、一瞬脳をかすめた。



# Metamorphose





## Lonely

「できるさ……できるさ……」

彼の声がリフレインしながら遠ざかっていった。気がつくと、私の幻影もいつのまにか消えていた。

光が激しく踊る昼も終わろうとしている。もう、空気も遊んではない。

私はちよつと、唇をとがらせてみた。

しかし、なだめてくれる彼はもう隣にはいない。

「あなた、サンパギータの意味知らなかったのよね」

そつと呟いてみた。

約束だったのよ……。

深い寂寥感が私を包んだ。

今日が丁度その一年後。

もしかしたら……。

そんな思いが私の中にあつたのかもしれない。あのざわめきは、不安と期待のざわめきだったのかもしれない。



約束した訳でもないのに。

彼はもういないのに。

バカみたい……。

目を上げると、わずかに残ったオレンジ色の粒子が、海面を染めていた。

きれいだ。

その時、肩の力がほんの少しだけ弛んだ気がした。そして、目に見えるものを信じてみようと思った。去っていったものは存在しないのだ。私の視界から消えたもの、それは始めから存在しなかったのだと思おうとつとめた。

やがて太陽も水平線に沈み、闇が辺りを包むだろう。人の感情など関係なく、時は確実に未来に向けて刻んでいるのだ。

そう考えているうちに、一つところに滞っている自分が憐れに思えた。せめて時と同じくらいに、自分も変わっていかなくては。そんな強迫観念にとらわれた。



もしれない。それほど私は、自分でも不思議なくらい、彼を愛していた。

「え？ なに？」

サンパギータの美しさに魅入っていた私は振り向いた。

「なんて言ったの？」

そう言っつて、彼の顔を覗き込んだ。

「いいよ」

彼は繰り返し返すことを嫌がっていたが、怒ったように呟いた。

「一年後も君とき、こうやってこの花がみれたらいいなつて、それだけだよ」

ふふ、私は小さく笑っていた。

「なんだよ」

今度は彼がむくれて聞いてきた。

「私も今ね、この花を見ててそう思ってたんだよ」

「……」

「……できればいいわね」

サンパギータの青い花を見つめながら、私はポツンともらした。

しばらくの間があり、彼は微笑み言った。

「できるさ」

私たちは幸福感に包まれ、陽が落ちるまでサンパギータの花を眺めていた。

後に私は、サンパギータには『約束する』という意味があり、若者が恋人に愛を誓う言葉に由来しているということを知った。

彼は知っていたのだろうか……。



# Illusion



## イリュージョン

私は、あてもなく島を歩いていった。乾いた風は椰子の葉を揺らし、光は陽気に踊っている。私は、眩しさに目を閉じた。すると、どこからともなく屈託のない笑い声が聞こえてきた。

薄く目を開けると、光の中ではしゃいでいる私の姿があった。なにもかもが輝いて見えた、あの一年前の私の幻影……。不安とか絶望とか、そういったマイナスの感情がこの世に存在するということさへ忘れていたあの瞬間。陰など微塵も感じさせない私の笑顔が、そこで弾けていた。

笑顔はいつでも、私の傍らにいる人に向けてられていた。時折、すねてみる。それが決して彼を不快になどしないことを私は知っていた。ひとしきりすねた後は、極上の笑顔を彼にプレゼントした。それで私たちは、もっと幸せになれたのだ。

その頃の私には、自分と同じ場所にはいない彼など想像もできなかった。ずっと私の傍らにいて、一緒に怒ったり微笑んだり、常にできる距離にいる。それが彼の存在だった。

もし彼がいなくなったら……。

そんなことが一瞬でも私の頭によぎっていたら、私は苦しくて呼吸困難になっていたか







「どうして来ちゃったんだろう……」  
ため息が声になった。

私は、ざわめきに押し流されるように旅に出たのだ。

しかし、たった独りの南の島は、あまりに切ない。



サンパギータ

সংগীত





















































伊藤智恵理写真集「サンパギータ」

撮影 原田つとむ

# HER

